２０２３年２月の総評に代えて

○林　　桂○

●春町　美月●（大阪府　46歳）

セーターの
香ばしい枯れ草
野うさぎみたいな少年

【評】枯草の中で一日遊んできた少年。「野うさぎみないな」の比喩がいい。野生の逞しさとウサギの弱さが同居している。

●さいう●（愛知県　18歳）

じだんだをうまく踏めない
いもうとが
抱きしめている
かいじゅうずかん

【評】三歳から五歳くらいの女の子か。「かいじゅうずかん」という平仮名書きがそれを示唆する。「かいじゅうずかん」を買って欲しいと全身で訴えているのだ。男の子ではなく、女の子であることがある意味リアル。怪獣に見せられる女の子だって絶対いるはずだからだ。日本で最

初の昆虫学者だと思われる「虫めづる姫」は女性だ。青虫を育て、蝶になることを観察している。変わったこまった子ちゃんのように読まれているが、読み方が違っていると、私は思っている。

●松下　誠一●（東京都　20歳）

プレス機に
焼かれるタコの音のよう
僕を名付けたひとの寝息は

【評】恐らく父だろう。父を超えてゆく思惟がある。かつて、斎藤茂吉研究の第一人者の本林勝夫氏から、これから土屋文明研究に取り組みたいと伺ったことがある。暫くしてお亡くなりになったので、叶わなかっただろう。茂吉の「死にたもふ母」のような自分の感情をすべて解放する肉親への愛に対して、文明はシニカルであるが、その中に愛情の奥行きのようなものがあるという示唆だったと記憶する。「病む父がさしのべし手はよごれたり鍍金（めっき）指輪ぞ吾が目にはつく」。人生の成功者とも言えず虚飾に満ちた父の姿を描く。叔父夫婦の愛情によって育てられ、父の愛を感じられなかった文明にとっては、当然のこととも言えるが、一方、そうした姿を姿として受け入れているとも言

える。

●小沢旭●（山梨県　21歳）

消灯、孤独も黙って寝ろ

【評】これ、短律自由律句として名句になるかもしれない。癒やしがたい孤独と共寝の生活。

●マズルカ●（山口県　20歳）

難しい方の「お」です、
そう「を」です。
しゃがんで蟻を見てるみたいな

【評】「を」がしゃがんでいる人を横から見た姿に似ている。考えもしなかったこと、しかも蟻を見ているという。なぜ、蟻なのか不明。しかし、突然「母の死や蟻鮮明に地を歩む」の句を思い出した。昭和三十年代の高校生の句。作者名は失念。

●もぐもぐ●（群馬県　18歳）

この家を出る日は
さっき買ってきた

牛乳の期限の次の日曜日

【評】進学などで、親元を離れることもその日程も決まったのだろう。偶然に見た牛乳の賞味期限との関係。実感とは、このような場面で突然現れる。

●永山　逢海●（神奈川県　19歳）

ゆっもらも　ゆもっも
と花震わせる
あおむしの幽霊のうたたね

【評】「ゆっもらも　ゆもっも」のオノマトペの面白さ。「どんぶらこっこ　どんぶらこ」の桃太郎の桃の流れる様などよりも、遙かに美しく創造的。

●辻村陽翔●（北海道　18歳）

ドラゴンになりきれないね
僕たちは白く
吐息を混ぜ合いながら

【評】だれもが一度はやった遊びかもしれない。冬の寒さで白くなった息を、ドラゴンの吐く息に見立てて遊ぶ。それはドラ

ゴンでない自分たちをも教えてくれた。

●篠遠　早紀●（東京都　24歳）

花杏寮退く君とグータッチ

【評】杏の花の咲く季節は年度末。学生寮か社員寮かを出てゆく友人との別れ。「グータッチ」の軽やかさは、若さでもあろう。決して湿っぽくはならない。

●澤田　幸季●（神奈川県　19歳）

六畳一人で
でかいくしゃみ

【評】尾崎放哉の「咳をしても一人」の孤独には病の影が投影されているが、掲句の「でかいくしゃみ」は、花粉症はあるかもしれないが、健康な一人の孤独である。誰にはばかることのいらない六畳間でのおおきなくしゃみに、「一人」が谺して帰ってくる。

●にしざわゆうと●（福井県　26歳）

春の昼歩いて地図を買いに行く

【評】私たちは原則「歩いて」ゆくしかない。こと改めて言うには及ばないことである。しかし、それが地図を買うためだというと、俄に不思議な色彩を帯びる。地図は歩くためのものだからだ。

●汐見りら●（東京都　22歳）

学級文庫の選書が
やさしいひとだった

元担任の逮捕聞く朝

【評】報道されるような社会的な犯罪を犯して逮捕されたのを知った。作者が知る「元担任」は、優しい人で、それが学級文庫の選書にまで反映されるような人だった。二面性と言ってしまえばそれまでだが、誰もが持つ複雑な人間性として、作者は受け止めているのだろう。

＊募集年度の最後の月の選評である。
　緩やかだが、短歌形式に拠る作者が増え、レベルも向上してきている。それはこの年代の短歌人気の反映かもしれない。
　全体的な作品のレベルも上がり、それは読む楽しみともなっている。感謝して、

年度の選を終えたい。